

2021年横浜ナザレン教会・聖霊降臨節第十八主日(9/19)礼拝
コリント信徒への手紙 I 15:12 節から 20 節「実に復活！」

【聖書】

コリント信徒への手紙 I 15:12 キリストは死者の中から復活した、と宣べ伝えられているのに、あなたがたの中のある者が、死者の復活などない、と言っているのはどういうわけですか。13 死者の復活がなければ、キリストも復活しなかったはずです。14 そして、キリストが復活しなかったのなら、わたしたちの宣教は無駄であるし、あなたがたの信仰も無駄です。15 更に、わたしたちは神の偽証人とさえ見なされます。なぜなら、もし、本当に死者が復活しないなら、復活しなかったはずのキリストを神が復活させたと言って、神に反して証しをしたことになるからです。16 死者が復活しないのなら、キリストも復活しなかったはずです。17 そして、キリストが復活しなかったのなら、あなたがたの信仰はむなしく、あなたがたは今もなお罪の中にあることとなります。18 そうだとすると、キリストを信じて眠りについた人々も滅んでしまったわけです。19 この世の生活でキリストに望みをかけているだけだとすれば、わたしたちはすべての人の中で最も惨めな者です。20 しかし、実際、キリストは死者の中から復活し、眠りについた人たちの初穂となりました。

1 死を超えて導く神への希望

新型コロナウイルス感染第五波がようやく収まって来たようです。8月、感染者が増加の一途をたどっていた時、首相と都知事が「軽症者は基本自宅療養で」と言い出した時は、言葉を失いました。感染しても医師にさえ診てもらえない事態になるのではないかと、国は民衆を守る気はないのか、と。多くの人の心配が的中し、自宅で急激に悪化し生死の境をさまよう感染者が増え、亡くなる人も相次ぎました。「新型コロナもそうだが、他の重い病気になっても医師に診てもらえる事さえできない。こんな事態が日本に起こるなんて。」緊張の毎日、入って来るニュースも暗いニュースばかりで心は鬱々としていました。しかし、ある聖書の言葉が、私の思いを神の方へと向けてくれました。それが、本日の礼拝の招きの言葉でもあります、詩篇第48編15節です。「この神は世々限りなくわたしたちの神／死を越えて、わたしたちを導いて行かれる」この詩篇の言葉は、信仰生活の折々で、私の心を甦りの主イエス・キリストへと向けてくれる聖書の言葉のひとつです。

今日は、毎週、順番に見て来たルカによる福音書を離れ、主イエス・キリストの復活に関して語っているコリント信徒への手紙I 15章のパウロの言葉に聴いていきたいと思えます。そこにイエス・キリストの復活とはどのような出来事か、どのような意味があるのか、が記されています。

2 復活、神のもたらす現実

主イエス・キリストの復活の出来事を言い表すのに、ロシア正教の復活節の挨拶を引用した説教者がいます。それで調べてみましたら、素晴らしい挨拶だったので私も紹介したいと思えます。ロシア正教の信徒達が復活節に交わす挨拶は、私達、プロテスタントの信徒にはとても新鮮です。一人が「キリスト復活！」と挨拶すると、もう一方が「実に復活！」と答えるというもの。この「実に復活！」という返答のうちの「実に」は、主イエスの復活のリアリティを強調しています。「主イエスの復活は、見せかけやごまかしではない、欺きや自己欺瞞でも、夢や幻想でもない、確かに現実に起こった事だ」という意味がこめられているのです。「キリスト復活！」「実に復活！」主イエスの物語は、聖金曜日の恐るべき死に究極的な終わりを持つのでは決してない。弟子達を巡る状況を根本から変えてしまった一つの出来事が確かに現実に起こった、という喜びの挨拶です。その現実を引き起こしたのは誰でしょうか？イエスを復活させたのは誰でしょうか？天の御神です。主イエスの復活こそ、揺るがしがたい神の現実です。この確かに起こった神の現実

に対する人間の応答が、「キリスト復活！」「実に復活！」という力強い信仰告白の挨拶です。

神の現実、だからこそキリストの復活は科学的に証明できる事ではありません。何故なら、先週も言いましたが、これは神が引き起こされた、いわば究極の出来事であるから。ある神学者は言いました。「究極者は、つまり神は、究極以前の領域にある認識装置によっては把握されない」。言うまでもなく、我々人間は、「究極以前の領域」にある者です。人間が全てを理解でき、説明できるのであれば、それは神の出来事ではないのです。

3 キリストの復活と死人の復活

では、イエス・キリストの十字架の死からの復活という神の現実、私達人間にとってどういう意味があるのでしょうか？主イエスだけが甦ったのなら、私達には何の意味もないように思えます。しかし、神の現実はそうではありませんでした。

パウロは語ります。「キリストは死者の中から復活した、と宣べ伝えられているのに、あなたがたの中のある者が、死者の復活などない、と言っているのはどういうわけですか。死者の復活がなければ、キリストも復活しなかったはずです。」ここでパウロは、次のように言っています。「君たちは死人の復活を否定しているが、それはキリストの復活をも否定する事となる。その結果として、教会の基礎と福音全体を破壊している。何故なら、キリストの甦りと死人の甦りは分ちがたく結ばれているからだ。」同じことを主イエスは次のように語っておられます。「私は復活であり命である。私を信じる者は死んでも生きる」。(ヨハネ福音書 11章 25節)

実にキリストの復活は、それだけで存在している単独の出来事ではないし、或る人々に起きたばらばらの奇跡でもありません。きちんとした人類共通の目標をもって神がなされたことなのです。どんな目標か、と言うと、私たち人間を究極的な滅び、「死」から救い出し、永遠の命に甦らせることでした。私達人間、死すべき運命に繋がれた者達、つまり死者の復活、このことを目指して、イエス・キリストは神によって復活させられたのです。

それは、パウロが次のように語っていることから分かります。20節「**実際、キリストは死者の中から復活し、眠りについた人たちの初穂となりました。**」初穂とは、最初に実が入る麦の穂のこと。初穂が実れば、この後、遠からず、次々と穂が実ることは確実。初穂は、やがて来る実りを保証する約束です。つまり、イエス・キリストの復活は、私達人間も又、死者の中から復活し、神の子とされる、という終わりの時の出来事が必ず起こる、と今、

天の御神が私達に与えてくださる約束なのです。

同じ内容をパウロはローマ書8章で次のように語ります。「神は前もって知っておられた者たちを、御子の姿に似たものにしようとあらかじめ定められました。それは、御子が多くの兄弟の中で長子となられるためです。」(ローマ8：29) 主イエスは十字架だけでなく、十字架の死から天の御神によって甦らされた事により、私達人間のキリスト、救い主となられ、兄となってくださったのです。

私達が神の子とされる約束に値するような何か特別の功績があるのでしょうか。いえ、被造物に過ぎない者達にそんな功績など立てようがありません。寧ろ反対に、天地万物を造られた真の御神を、神とせず、自分達を神として生きようとする私達です。天の御神は、その私達の背きの罪を全て御子イエス・キリストに負わせ審き、十字架に架けて滅ぼしました。そして、三日目に復活させられたのです。それは、罪人である私達の罪を聖め、永遠の命を与えて、ご自身の子とするためでした。ご自身に背く人間を深く愛し、死すべき運命から解き放ち、死者の中から甦らせる、天の御神は私達のために、何の功績もないばかりか、ご自身を抹殺しようとする敵のために、そこまでなさいます。

4 宣教と信仰

この神の現実が、弟子達を劇的に変えます。この弟子達の劇的な変化によって、イエス・キリストは確かに甦られた、ということが証されるのです。私たち被造物が、主イエスの復活の出来事を完全に把握する事は、これから先も不可能であり続けるでしょう。ですが、弟子たちの変化にはつきりと刻印され、主の十字架と復活から展開された現実はしっかりと捉えることはできます。主イエスの十字架刑ののち、弟子たちは憔悴し、萎縮し、悲嘆に暮れていたことを思い起こしましょう。彼らは内に引きこもり、不安に駆られて扉の背後に隠れ、門をおろしてしまいました。しかし、今や、復活の主イエスにより事態は一変します。彼らは「新しく生まれた者のように」なり、恐れを乗り越え、閉じられた扉を開け、部屋をあとにし、復活された方の名において「全世界に出て行く」道を勇んで進んで行きます。

そして、信仰者でない歴史家が驚くような現象が起こりました。一握りの単純素朴な漁師たちと女たちが、ローマ帝国内のたいして重要でもなかった一地方から出発し、勇敢にもあらゆる国境を超えて、福音を宣べ伝えていったのです。彼らは、命を賭けて、多くの艱難と試練を克服し、迫害に耐え抜きました。そして、福音に耳を傾ける聴衆と十字架と復活の主イエス・キリ

ストへの信仰を獲得したのです。そしてこの無名の信仰者達が、世界を確実に変えていきました。彼らは当時の古代世界では考えられないような全く新しい行動をとります。当時は弱肉強食の時代。人権とか福祉という考え方はありません。社会的弱者、未亡人やみなし子達は実に惨めな存在、死と隣り合わせの存在でした。しかし、キリストの復活によって押し出されて行った男女の弟子達は、未亡人やみなし子たちを引き取り、教会の中で養いました。このような、当時の世界からすれば非常識ともいえる弟子達の業、隣人への愛の業こそ、キリストの復活が確かに起こった、という神の現実を証しているのです。

パウロはこの事を次ぎのように述べています。14節です。「そして、キリストが復活しなかったのなら、わたしたちの宣教は無駄であるし、あなたがたの信仰も無駄です。」この文章の逆を考えると、「キリストは確かに復活したのだから、私達の宣教は無駄ではないし、あなたがたの信仰も無駄ではない」です。弟子達の意味ある信仰と宣教の基には何があったか？キリストの復活によってなされた確かな約束、救いへの約束があったのです。弟子達は、イエス・キリストの十字架と復活によって、自分達の罪の赦しと救いを望んで止まない神の愛を知り、神の子とされる将来を確信したのです。だから、「信仰と宣教」を担う者となれました。神のみ業、イエスさまの御業に、加わる者となれました。そして、信仰と宣教を担う中であって、「実に復活！」キリストが十字架の贖罪から復活した事を繰り返し確認し、心に刻むこととなるのです。

そうです、キリストの復活の出来事は、人が直接関わることなどせず、遠くから傍観することができる自然や歴史の諸現象ではないのです、人が客観的に思いのままに把握できるようなものでもありません。私たちは、自分から復活の主イエス・キリストに関わろうとはせず、遠くから眺めるだけでは、決して、神を把握し理解する事はできません。私たちは神を信じるのであって、神を観賞するのではないのです。

キリストの復活という出来事は、人を信仰へと促すような力を持つ出来事であり、自身の生涯を賭けて証言をせずにはおれない力を持つ出来事です。主イエスの復活の力にとらえられ信仰が与えられた者の証言によってのみ、証され宣べ伝えられるような出来事、それがキリストの復活です。

だから、キリストの復活への応答は、十字架の死から甦ったイエスを我が救い主、我がキリストと信じ、証人としてイエス・キリストを宣べ伝えること。つまり、「宣教と信仰」となのです。そして、「宣教と信仰」を担う事によってより確かに、私達はキリスト・イエスを経験する事となります。

5 列に加わる

このように、教会では、キリストの復活は、私達人間の決定的な定めに関わる出来事、私達の罪が赦され、死の力が打ち破られたという出来事と理解されました。そして、復活の主に出会い劇的に変えられた弟子達は、この信仰を、趣味のサークルのような仲間内に押しとどめておくことはできなかつたのです。こうして、「キリストの復活」という神の現実は、人間世界で「連鎖反応」を引き起こす、強力な「起爆剤」として働きます。使徒達、弟子達は各地のユダヤ教のシナゴグに入っていく、世界の知性を象徴すると言われたアテネのアレオパゴスにも乗り込んでいきました。失敗しても何度でも立ち上がり、世界の各地で主イエスに倣い、愛の業を行い、イエス・キリストを宣べ伝えていきました。その様子は先程申し上げた通りです。そんな彼らの信仰と宣教が、確実に世界を変えていきます。

何故なら、この信仰と宣教が人間だけの業ではないからです。神の御子、復活された方が、弟子達の先頭に、多くのきょうだいしまいの「初穂」として、長男として、立っておられ、導いておられるからです。キリスト・イエスに率いられる列の者は呼ばわれます。「キリストは復活された！」「実に復活された！」と。死の陰の世界にいる全ての者たちにも、この「キリストは復活された」という福音は効果をもたらします。暗黒の権力や暴力の奴隷となっている人々もまた、「キリストは甦られた」と呼びかけられます。新型コロナウイルスという疫病による死の不安におののく者達もまた、死を超える永遠の命の希望を聴きます。キリストは甦られた、そして私達の死もまたその力を失った。私達全ての人間を縛り付けて、絶対的だと思われていた死の支配に突破口が開かれ、死の力への絶望的な信仰が打ち破られた、喜びの使信です。この方こそほんとうに頼りになる方、「死と陰府（よみ）の鍵を持っている」方（ヨハネ黙示録1：18）が、私たちのために現れてくださいました。そして、決して消えることない命の権利が、私たちのために、復活の朝、イエス・キリストによって獲得されたのです。

皆さん、復活の福音において重要なのは、復活がもたらしたこの展開、宣教と信仰という展開です。私たち人間の定めにおける決定的な転換が重要であり、新しい生の展望がうち開かれるという事が肝心なのです。私達の現実に、新たに生まれ、どんな試練の中でも生き生きとした生きる望みを与えられることが、重要なのです。永遠の命が与えられるから、死を超える命が約束されているから。ですから、私たちすべて、私たちのうちの老いた人々も、人生の酸いも甘いも噛分けた人々も、来るべき復活へと招かれています。来るべき死に招かれているのではありません。来るべき復活へと招かれ続けて

います。そのために、日々、私達は新しくされていきます。こうして、復活の使信は、死によって脅かされていた私たちの人生を劇的に変えるのです。

これを「キリストの復活は、私たちの人生の括弧の前の、動かしがたい符号だ」と言った人がいます。「誕生」という左括弧と、肉体の死という右括弧に囲まれた私達の人生には、その括弧の中で実に多くのことが起こります。人生という「括弧」の中には、絶頂もどん底も、喜びも悲しみも、幸せも失望もあります。けれども、これらの人生の様々な出来事をくくる括弧の前に、ひとつの符号が置かれました。私たちの人生の全ての出来事を、揺るがしがたい「希望」に変え、将来に対して意味あるものと変える、強力な符号が置かれました。それが、キリストの復活です。

別の言葉で言えば、私たちそれぞれ違います、人生の経験も異なります。しかし、それにも拘わらず、私達は同じ人類の長い列の中にいます。その先頭に、私たちと共に、また私たちのために、生きる望みの初穂、私の主、私の神が立っておられる列です。キリスト・イエスが列の先頭に立ってくださった事によって、永遠の命に希望を持って進む列であります。この真の命を生きる者の列に加わろう、死を待つ列を離れて、永遠の命に生きる列に共に加わろう、と呼びかける、それが宣教です。

何か特別な事ではありません。私達は、この永遠の命への導き手イエス・キリストを我が主、我が神と受け入れる時、今、自分の人生で起こる良い事も悪い事も相対化して見ることができます。今起こっていることは、全て過ぎ去る、と確信できるから。ひとつ一つの良い事に有頂天になり高ぶることも、悪い事に絶望することもなく、落ち着いて過ごすことができます。色んな苦労はあるでしょう、時には堪えがたいと思われるような試練も襲うでしょう。しかし、甦りの主キリスト・イエスは、ご自身の従いゆく者を、ご自身の妹、弟を決して見捨てたりはしません。必ず、守り導いてくださいます。

こうして、私達は、この世界で最も意味ある業、信仰と宣教、復活した主イエスの証人という業をなしつつ、永遠の命への道をイエスに従って歩むこととなります。なんと有意義な命でしょうか。

主イエス・キリストの甦りを憶えて集う日曜礼拝、溢れる喜びをもって「キリスト復活！」「実に復活！」という挨拶を交わしたい、と願います。「キリスト復活！」「実に復活！」